

ヨーリス・フフナーヘル晩年画中画における蒐集実践の視覚化

東北大学 河村 耕平

本発表は、16世紀フランドルの画家、ヨーリス・フフナーヘル(1542-1600)が晩年に描いた画中画形式の作品が、同時代の蒐集実践において、「蒐集箱を覗き込む」という特異な視覚的経験に基づく試みであるということを示す。

現存する《ウェヌスとクピド》(1590-91)二作、《レダと白鳥》(1591)、《プットーと髑髏》(1598)は、それぞれの物語の一場面が描かれた楕円形のメダイヨンが中央に描写され、周囲には昆虫や植物、貝殻などが無秩序に描かれている。繊毛などの細部描写と、投影による立体感の表出によって、実物が置かれているような効果を生んでいる。

さらに、画面の外縁に描写された枠の上には、カタツムリやケムシが這うように描かれている。このような空間性を絵画に与えることで、標本箱といった、一種の蒐集空間を覗くような経験を観者に与えている。特に、《レダと白鳥》におけるレダの視線は、白鳥ではなくこちら側へと向けられ、観者の視線を空間内へと誘導している。

ヨーリスと同時代の博物学者ウリッセ・アルドロヴァンディ(1522-1605)は、細密で忠実な自然物描写には実物標本と同等の価値があるということを強く意識していた。このことは、時間と生命の制約がある生きたものを一箇所にまとめることができない場合、迫真性の高い絵画で描くことが要求されていたことを暗示している。つまり、実際には困難であった実物の蒐集と言う意味で、ヨーリスの画中画は蒐集実践の再現と言い換えることができる。

先行研究では、同時代の画家ハンス・ボル(1534-93)が描いた「新・旧約聖書の風景二十四連作」(1584)からの直接的な影響が示唆された。しかし、ボルの自然物描写における装飾的表現に対し、ヨーリスの描写は、実際の標本を見ているかのような、全体と細部における真実性・迫真性が際立っている。このような描写上の特徴からは、アルドロヴァンディの言葉にも表れているように、同時代の蒐集精神を反映していることが窺える。

ヨーリスが晩年に描いた画中画作品は、彼以降の画家たちによる、画廊や蒐集室を描いた作品の先駆的な例になっている。つまり、箱型空間を主題として、描かれた人物の眼差しによって観者を空間内部に引き込む描写は、ヨーリスが後の時代に先駆けたものである。特に、ピーテル・パウル・ルーベンス(1577-1640)とヤン・ブリューゲル(父、1568-1625)の共作「五感の寓意」の一つ《聴覚の寓意》(1618)などにおいては、観者を誘うレダの眼差しと箱型の空間を踏襲しつつ、拡大したものと考えられる。

以上のように、ヨーリスの画中画に示された、自然物における迫真性の追求、箱型蒐集空間による展示は、同時代の蒐集精神の要求に応えるために、その特徴的な視覚的経験をイメージへと変換する試みである。それはまさに、時代を先駆けて蒐集実践そのものを視覚化した、実験的絵画であったと言える。